

保塞蛮夷小考

佐藤 達郎

はじめに

歴代中国王朝が、辺境防備のために周辺異民族を積極的に利用してきたことは周知の所である。本稿では、漢代における辺境防備体制と周辺民族との関係を総合的に考察するための一つの基礎作業として、保塞蛮夷とよばれる民族諸集団を取り上げたい。

前漢から後漢にかけて、保（葆）塞蛮夷、あるいは保塞某族（匈奴、羌、烏桓）などと呼ばれる辺境異民族のいたことが知られているが、二〇〇〇年代に入り、これらがとくに中国の学术界でとみに取り上げられ始めた。そこで本稿では、まず保塞蛮夷をめぐる諸説を紹介し、それらの検討と批判を行いつつ保塞蛮夷の実態、その中国王朝との関係などにつき改めて考えてみたい。

一 保塞蛮夷をめぐる諸説について

先述のように、保塞蛮夷が近年とくに中国の学术界で注目され始めた、その理由の一つは、二〇〇〇年代初頭に発掘・公表されたエチナ漢簡中に「葆塞」の語の見えることであり、いま一つ、その背景には現代中国の抱える課題があるように思われる。それは端的に言って、中華とは何かという問いであり、漢民族の形成と周辺諸族の同化過程、国家統合とその中における彼ら双方の民族意識、「認同」（アイデンティティ）が、今日の「一つの中国」の命題と重なる、改めて問われているのである。以下、保塞蛮夷に関する論文を公表年順に挙げる。⁽¹⁾

劉瑞「秦、西漢的“内臣”与“外臣”」

廖伯源「論漢代徙置边疆民族于塞内之政策」

林永強「漢代“葆部”的社会治安功能考論」

〃「“葆塞蛮夷” 相關問題考論——以“葆為行政機構說” 等問題的探討為中心」

朱聖明「兩漢“保塞蛮夷”考論」

なおこれらの他、日本でも渡邊英幸氏に保塞蛮夷に関する部分的言及があり、また、専論として矢沢忠之氏による学会口頭発表があるが、⁽³⁾残念ながらその詳細な内容はまだ活字化されていないようである。発表要旨から知られる氏の論点については、のちに部分批判とともに言及したい。

まず、林永強氏の二論文は、漢簡の記録とそれに対するM・ローウェ氏の指摘⁽⁴⁾により、辺境異民族を管理する「葆部」の存在を想定し、その前提の上に漢朝の周辺民族支配のシステムを論ずるものだが、その論は根底から成立し難

いため、先に批判しておく。氏が論拠とする漢簡は次のものである。

葆・部界中民・田・官畜牧者、見赤幡、各便走近所亭・障・塙辟□Z馬驅以急疾為故。(73.EJ.F3:80)

これは、一九八八年出版の『居延新簡釈粹』⁽⁵⁾に釈文のみ紹介され、その後、二〇一六年出版の『肩水金閼漢簡(伍)』⁽⁶⁾に改めて図版とともに公表されたものである。右に掲げた釈文の標点は『釈粹』に拠る。編者が注をつけるように、この簡は前後に紹介される五簡とともに、肩水都尉府の烽火品約の一部をなす。この簡冒頭の「葆部」を林氏は「葆塞蛮夷の所轄区域」、「区域を管理する地方組織で、所轄内の社会治安にも一定の管理責任を負った」とし、また傍証として居延旧簡中、次の諸簡を「葆部」の居民の戸籍関係文書とする。⁽⁷⁾

Z奉葆姑臧西北夜里Z

Z河津金閼毋苛留Z (97・9)

葆小張掖有義里Z (119・67)

葆饒得敬老里王嚴年廿五 (62・43)

遣葆饒得安国里韓忠為Z (334・29)

果たしてこれらは林氏のいうように「葆部」所轄の蛮夷の記録なのであろうか。姑臧県の西北夜里、小張掖県の有義里、そして饒得県の敬老里と安国里、いずれも郡県下の一般の里であると思われるべきで、そこに属するという王嚴、韓忠とも蛮夷にあらざる漢人に違いない。注意すべきは、右の諸簡は97・9簡がA33(地湾)すなわち肩水都尉府遺跡より出土する他、いずれもA32肩水金閼遺跡より出土することである。97・9簡が典型的なパスポートの文言を備えることから窺われるように、これらは戸籍関係文書ではなく、関所の通過に際する何らかの記録であるに違はなく、ここに見える「葆」もその意味は不詳ながら、少なくともローウェ氏らのような所屬組織ではなく(この

類の関出入に関する記録に、必ずしも所属郡名は記されない）、身元保証に関わる何らかの身分——たとえば保任・同保、あるいは庸保など——を示す言葉であろうと思われる。想像するに、林氏は「葆」とくさかんむりを冠する語に特別な意味を見いだし、それを性急に「葆部」と結びつけようとしたのではなからうか。しかし漢簡において葆と保とは普通に通用すること、ここで論証するまでもない。

では、先掲 73.EJ.F 3:80 の「葆部」はどうであろうか。管見の限り、「葆（保）部」の語はこの簡にしか見られない。まず、「葆部界中」に続く「民田官畜牧者」は、舂山明氏も解するように「民や田官の家畜を放牧している者」であるに違いなく、田官とは屯田官の謂いであるから、そうであれば「部界中」には民ならびに屯田官（とその下の田卒）が属したことになる。通常、屯田官は農都尉のもとに統括され、屯田区における治水・耕作に従事したと考えられるが、蜜夷を管轄する特別行政区にも屯田官と田卒が置かれたとなれば、それは林氏のいう「一定の区域自治性質」と矛盾するのではなからうか。実は『肩水金関漢簡（伍）』でつい最近明らかになったのだが、この簡は 73.EJ.F 3:80 簡と綴合され、次のように少なくとも（左側が破断しており、なお行の続く可能性がある）四行書きで、当該の記述は三行目に書かれ、しかも三、四行目は上部が大きく折損しており、前から字が続いているはずなのである。

Z 蓬火品田官民塲辟拳葆和母燔薪

Z

Z 鄣塲辟田官拳葆燔三積薪和皆如其部葆火品

Z

Z 葆部界中民田官畜牧者見赤幡各便走近亭鄣塲辟葆 Z

Z 馬馳以急疾為故

よって、この部分は「葆」ないしは「葆部界中」で切れ、「…葆「せよ」。部界中の民、田官の畜牧せる者は…」ないし「部界中に「入?」葆せよ。民、田官の畜牧せる者は…」のように読むべきであろう。断裂して失われた前半部分

の意味は不明ながら、「葆部」なる特別行政区域の存在をこの簡から指摘できないことは、まず間違いない。

次に紹介するのは劉瑞氏の説である。氏はまず史記漢書に見える「外臣」「内臣」の語に注目し、外臣とは漢朝にゆるやかに羈縻し、王号を賜つて時に朝貢を行うのみの事実上の独立政權、内臣とは郡県制が適用され、漢朝より派遣された官吏のもとに直接統治を受ける地域の臣民であるとする（ただし蛮夷が服属して後者となった後も、その部族長には部族民の統治が引き続き認められた）。ついで葆（保）塞蛮夷の活動した地域を検証した結果、彼らはみな塞内で活動しており、ゆえに郡県の統制下、属国都尉など異民族統治のための機関によって管理された内臣であるとする。なお外臣・内臣の別についての古典的研究として周知のように日本の栗原朋信氏のものがあるが、劉氏はそれに全く言及していない。日本語文献なので仕方ないかもしれないが、論証過程が一部に酷似するのは偶然であろうか。

この劉説に依拠してさらに論を展開するのが朱聖明氏である。氏は内臣・外臣に関する劉氏の区分、および保塞蛮夷が基本的に前者に属するとの指摘に賛同した上で、「保塞」が塞内で行われること、また「蛮夷保塞」と「保塞蛮夷」との峻別を主張する。前者は行為としての「保塞」（その意味を氏は後述のように五分類する）を塞内外の蛮夷が自主的・選択的に行うことであり、対する後者は、すでに塞内に居住する、ある特定の蛮夷を指すものだという。塞内に居住する以上、彼らは内臣として必然的に郡県の管轄下に置かれ、その下で部族長による部族民統治が旧来のまま維持された。部族民の中原政權への帰属意識は低く、彼らは自身の民族的アイデンティティを保持しつつ、塞外の同一民族と中原政權との力関係によっていづれかへの帰属を現実的に選択したというのである。ちなみに台湾の王明珂氏は一九九〇年代、辺境民族の漢族への同化と異化の歴史を通じて、「中華民族」と周辺諸民族のアイデンティティの形成過程を実証的かつ理論的に論じており、そこには当時の台湾人のアイデンティティをめぐる問題意識が鮮

明に投影されている。朱論文の問題提起は明らかに王氏のそれと通底するものだが、意識的にか、大陸の朱氏は王氏著に言及していない。

最後に、廖伯源氏は広東生まれ、現在は台湾に身を置く漢代史の大家である。氏は漢代の周辺民族の塞内への移徙を論ずるなかで保塞蛮夷についても取り上げ、彼らを「漢の朝廷に降附した蛮夷で、辺塞附近に居住し、塞に依拠して自身を保ち、また漢を助けて辺塞を守った」ものとし、保塞蛮夷は必ずしも塞内にいる必要はなく、塞外近傍にいてもそう称され得た、とする。大家らしい穏当な説と思われるが、彼らが塞外にも居住し得たとする点は朱氏によって否定されている。

以上紹介した四氏の説のうち、林氏のそれはすでに批判済みなので、次章では主として劉氏と朱氏の説を、いくつかの論点にわけて検討していきたい。

二 諸説の検討…とくに劉氏説と朱氏説を中心に

(1) 保塞の語義について

朱氏は、伝世・出土文献に見える保塞の語義について、次の五種に分類している。①塞外民族が塞内に住んで自らを保安する。②塞外民族が圧迫を受け、軍事・政治的庇護を求めて塞内に入り、自らを保安する。③塞外民族が塞内に住み、漢朝のために塞を守る。④緊急状況に遭遇して塞外民族が塞内に入り、漢朝が塞を守るのに協力する。⑤塞外民族が漢朝の藩属となり、辺塞を侵略しない。

これらの語義は、さらに大きく二ないし三類型に大別できよう。すなわち①②の「保」は「自ら保つ」の意、⑤の

それは「安んじる、安定させる」、対する③④は「防衛する」といった意味に解釈されていることになる。ここで「対する」と述べたのは、①②⑤と③④とでは「保」の対象が異なるからであり、前者は蛮夷自身、後者は「塞」そのものが対象として想定されている（ただし⑤は両様に解しうるが、朱氏が⑤の一例として挙げる『史記』朝鮮列伝「保塞外蛮夷、無使盗辺」は明らかに前者である）。そこで改めて、各類型の例として朱氏の挙げる史料を見直してみたい。

①「匈奴右賢王」往来入塞、捕殺吏卒、毆侵上郡保塞蛮夷、令不得居其故（師古曰：保塞蛮夷、謂本来属漢而居辺塞自保守）。（『漢書』匈奴伝上）

②单于自請願留居光禄塞下、有急保漢受降城（師古曰、保、守也。於此自守）。（『漢書』匈奴伝下）

③及南单于保塞、北方無事。（『後漢書』馬成伝）

烏桓或願留宿衛、於是封其渠帥為侯王君長者八十一人、皆居塞内、布於緑辺諸郡、令招来種人、給其衣食、遂為漢偵候、助擊匈奴・鮮卑。…及明・章・和三世、皆保塞無事。（『後漢書』烏桓伝）

④（上孫家寨漢簡…後述）

⑤遼東太守即約滿為外臣、保塞外蛮夷、無使盗辺。（『史記』朝鮮列伝）

单于驩喜、上書願保塞上谷以西至敦煌（師古曰、保、守也。自請保守之、令無寇盗。）、伝之無窮、請罷辺備塞吏卒、以休天子人民。（『漢書』匈奴伝下）

これらの例が必ずしも「保塞」の熟語を含まないことは今は問わず、保の各例における意味について見てみるに、①②の師古注は「自保守」「於此自守」としており、先に概括した①②の語義として問題ない。⑤のうち朝鮮列伝の記事は、先にも触れたように「塞外蛮夷」を目的語としてとるゆえ、明らかに「安んじる」の語義で①②に近い。一

方、匈奴伝の「保」は師古注に従えば塞を守るの意で③に近いが、ただし塞内にいたか否かは問われてはいない。むしろ⑤の例として挙げるとすれば「单于保塞為藩、雖欲北去、猶不能為危害」（『漢書』匈奴伝下）、「匈奴頼先帝之德、保塞称蕃」（『漢書』息夫躬伝）などであろうが、これらも「為藩」「称蕃」によつてはじめて藩属となったことが示されるのであり、保塞の語そのものはあくまで「塞を犯さない」の意にとどまるだろう。④の上孫家寨漢簡の解釈については、後に詳述する。以上通見すれば、保塞とは塞の近傍（語義的には内外を問わない）で自らを保守する、塞を守衛する、塞を侵犯しない、といった意味に集約でき、ここに挙げていない典籍事例もこの三者いずれかに分類することができる。矢沢氏の学会発表論旨によれば、氏は保塞について「漢に属してその辺塞を守る」「辺境防衛を行う」「匈奴の侵寇に対して防衛しようとした」意と解しておられるようであり、保塞の語義解釈において一面的と言わざるを得ない。また、繰り返せば保塞の語義自体には、塞の内部か外側かの含意はないのであって、朱氏の分類・定義づけにはいささか恣意的な方向付けがあるように思われる。

なおここで、あえて保留していた「塞」の語義について述べておきたい。『漢簡語彙 中国古代木簡辞典』^⑫に「塞」を「①防壁。主として辺境に設けられたものを指す。長城。②防壁に沿って設置された防衛施設。…」と説明するよう、塞といえはまず北辺のいわゆる長城と、それに付随する防衛施設が想起されるが、地域によつて木柵あるいは自然の山河を利用したものもあったこともよく知られており、たとえば羌族の住む河西地方では「漢遂因山為塞」（『後漢書』西羌伝）という。『後漢書』馬防伝には「金城・隴西保塞羌」の存在が見え、そして金城・隴西西郡には「金城塞」「隴西塞」のあったことが、『後漢書』西羌伝などより知られる。実体としての防衛施設「塞」があればこそ、「保塞」の語も生まれるであろう。ただ、こうした防衛ラインとしての「塞」を越えての、漢朝への帰順行為が必ずしもその居住地域の移動を意味するのではない。たとえば次の例、

建武十三年、広漠塞外白馬羌豪樓登等率種人五千余戸内属、光武封樓登為歸義君長。（『後漢書』西羌伝）

「種人五千余戸を率いて内属」したという塞外の白馬羌が、必ずしもその現住地を移動した訳でないことは、これにつづく一連の記事の中に「明年（永初二年）、蜀郡徼外羌薄申等八種三万六千九百口復拳土内属」とあることから推測される。「拳土内属」とは、現住地を挙げて、すなわちその地に住んだまま漢朝に帰属する、の意に他ならない。「内属」が塞の内外を問わないことは、極端には「西域内属、有三十六国」（『後漢書』西域伝）の例からも明らかである。そうした観点から後漢建武年間の次の記事、

於是徼外蛮夷夜郎等慕義保塞、延遂止罷偵候戍卒。（『後漢書』循吏任延伝）

を見れば、やはりこの場合も夜郎ら徼外蛮夷は「保塞」ののちも徼外の地から居所を移すことなく、依然として故地にとどまり続けたのではなからうか。そうであればこそ、彼らがのちの安帝年間に

（永初元年）九真徼外夜郎蛮夷拳土内属、「開境千八百四十里」（『後漢書』安帝紀、南蛮伝；「」は南蛮伝）

のように現住地を挙げて内属することも起こりえたのであろう。またこの内属の結果、境域が大きく開けたというのであるから、支配領域の辺境界とはこのように周辺民族の帰順如何によって可変的な、不鮮明な線なのであり（この点、犬牙錯綜せる内地の郡国境界とは同一に論じられない）、ある民族集団が防衛施設としての「塞」の内にあつたか外にあつたかは、彼らの漢帝国への帰属のあり方を問う上で本質的な關鍵とはならないのではなからうか。

（2）塞の内外をめぐって

先に、塞の内外を分ける議論の有効性について疑義を呈したが、改めて、保塞蛮夷が居住・活動したとされる地域について再検討したい。劉氏が彼らを郡県の下に入ると見なし、また朱氏が彼らを塞内に居住したとみる最も有

力な根拠は、次の記事である。

其（文帝）三年五月、匈奴右賢王入居河南地、侵盜上郡葆塞蛮夷、殺略人民。（『史記』匈奴列伝）

上郡葆塞蛮夷とは、上郡内に居住する蛮夷であり、よってそこは塞内であったというのは、一見もつともである。しかし郡の管轄域が塞内に限られなかったことは、たとえば北地郡の渾懷都尉が「塞外渾懷障に治」し、上郡の匈奴都尉が「塞外匈奴障に治」し、西河郡の南部都尉が「塞外翁龍・埤是に治」したという『漢書』地理志の記事からも知られる。さらに、「金城塞外羌」（『漢書』翟方進伝）、「広漢塞外白馬羌」（先掲『後漢書』西羌伝）のような言い方がある以上、「上郡葆塞蛮夷」が塞の内外いずれにいたかは葆（保）塞の語義一つにかかっている訳だが、この語自体に塞の内外を分ける意味は含まれないこと、先に述べた通りである。

また、漢印には「漢保塞近群邑長」の印文が見える。⁽¹³⁾近群が近郡に同じであることは諸家の指摘の通りであろう（これが王莽時代の「近郡」⁽¹⁴⁾でないことは「漢」の国号が冠されることから明らかである）。そして近郡とは「郡に近い」すなわち郡の近傍の意であろうから、郡の外側にあって内部には属さないとするのが素直な解釈であろう。以上、某郡（州）保塞某族の表現が必ずしも彼らの塞内での居住を意味しないことを述べた。劉氏の挙げるその他の事例の多くも同様に考えることができる。確かに状況の上から塞内での活動を想定できる例もあるものの、諸例のすべてをそうと判断するには無理がある。

今ひとつ、朱氏が「保塞」の特別な意義として、塞内にあるものを指したとする根拠は次の木簡の記録である（断句は筆者）。（ ）はもとの釈文、「」は意を以て正した字。⁽¹⁵⁾

校尉苞□□度遠郡益寿塞徼、召余十三人当為単（乎）「于」者、苞上書、謹□□為単（乎）「于」

者十三人、其一人葆塞稽朝（侯）「侯」咸妻子家属、及与同郡虜智之将業（2000 ES 9 SF 4 : 10）

これは二〇〇〇年にエチナ河流域より新たに発見されたいわゆるエチナ（額濟納）漢簡の一つで、ここに挙げたものは前後少なくとも七本から成る冊書の一部をなす。繁を避けてここでそれらすべてを挙げることはしないが、この一連の冊書は王莽時代の始建国二年十二月、呼韓邪单于の子孫十五人を单于に冊立するとともに大赦を命ずる詔と、それに伴う恩賞規定と考えられる。羅新氏らの指摘の通り、『漢書』の記事と照らせば、ここに見える人名のうち苞16、中郎將蘭苞、虜智、虜知、囊知牙斯、烏珠留若鞮单于であることがわかる。咸とは右犁汗王咸、のちの孝单于をさすと考えられている。朱氏や羅氏らは二行目の「其一人葆塞」の後で点を切っており、朱氏によれば、单于に冊立された十四人中ただ一人が「葆塞」していることから、この「葆塞」は単に塞の近傍に居住するのではなく（それなら他の十三单于も該当する）、ただ一人塞内にいた者であるという。しかし私は、ここは右に句点を施したように葆塞は下につなげて読み、「葆塞稽朝侯」を咸の爵号と解するべきだと思う。彼の父の呼韓邪单于は稽侯獬を名としたが、この稽侯は匈奴の爵号に違いない。王莽の始建国二年の詔勅に次のようにいう。

惟知先祖故呼韓邪单于稽侯獬累世忠孝、葆塞守微、不忍以一知之罪、滅稽侯獬之世。今分匈奴国土人民以為十
五、立稽侯獬子孫十五人為单于。（『漢書』王莽伝中）

王莽は、呼韓邪单于稽侯獬の代からの忠孝の功を賞して、咸の代に至るまでその爵号を世襲せしめ、さらに「葆塞守微」の功を記念して「葆塞」「朝」の字を加えたのではなからうか。そうだとすれば、ここに見える「葆塞」も朱氏のごとく特別な意味を有するものと解する必要はなくなるだろう。

（3）蛮夷葆塞と葆塞蛮夷…とくに上孫家寨漢簡の解釈を中心に

朱氏は、蛮夷葆塞すなわち蛮夷による葆塞行為一般と、特定の部族に冠せられる称号としての葆塞蛮夷とを区別

し、前者は塞外の蛮夷が自主的・選択的に行う行為であるのに対し、後者の事例はすべて塞内に限られ、それらは郡県管制下にある蛮族を指すものであるとした。すべて塞内に限られるか否かの論拠が不確かであることは先に指摘した。一方、前者が塞外蛮夷による選択的行為であるとした、朱氏らの大きな根拠は次の木簡の記載である。⁽¹⁷⁾

諸塞外蛮夷為外臣葆塞及不塞者、外有急、軍吏謹以辨道、其不入葆及不居塹内与吏卒相佐者、輒言二千これは、一九七八年に青海省大通県上孫家寨一一五号漢墓より出土した、いわゆる上孫家寨漢簡のうちの一枚である(原簡番号338)。計約四〇〇点の木簡は『孫子』に類似する兵法、および軍功褒賞など軍事に関わる諸規定から成っており、本簡も塞外の外敵侵入に際する軍事行動とそれに付随する罰則を定めたものと思われる。いちおう釈文に従って訓読、訳出すれば次のようになる。

諸ぞ、塞外の蛮夷の外臣と為りて葆塞し及び「葆」塞せざる者、外に急有らば、軍吏は謹んで以て辨道せよ、其の入葆せず及び塹内に居りて吏卒と相い佐けざる者は、輒ち二千「石」に言え、：

(塞外の蛮夷で外臣として「葆塞」している者および「葆塞」していない者に対しては、塞外に危急事態が起これば軍吏は彼らにしっかりと言い聞かせ、彼らの中で「入保」せず、あるいは塹壕の内側にあって漢朝の吏卒と協力しない者がいれば、そのたびに二千石官に報告せよ。…)

塞外蛮夷で、外臣にして (a) 「葆塞」する者と (b) 「葆塞」せざる者 (外臣は明らかに両者に係る) とがおり、危急、たとえば塞外羌の大反乱勃発などの際、漢朝の軍吏は彼らが反乱勢力に荷担するのを防ぐべく、しかるべき行動を彼らに辨告したことであろう。その内容は (c) 「入保」おそらくは保塁 (塞内か塞外かを問わない。塞外にも漢の築いた城塞があった) などへの退避、および (d) 塹壕「で画された区域」内での吏卒との協力要請であり、それを怠った場合には二千石官に報告された上でしかるべき譴責・処分が下されたのであろう。(d) 塹壕内での漢朝へ

の協力を要請されていたものは（a）の保塞者に違はなく、対する（b）の不塞者に対しては（c）、身を慎んで敵対勢力に荷担せざることを求められていたものと考えられる。

劉氏はこの条文につきこのように述べる。「外臣」となった「塞外蛮夷」は中央の管理には属さず、彼らは「葆塞」（これは外臣としての一つの義務である）するなり、あるいは「不塞」・「不入葆及不居塹内与吏卒相佐」（つまり不葆塞）するなり、自己の自主権を持つており、これは前述の「外臣」に関する分析と一致する。」朱氏もこの劉氏の指摘を踏まえ、「塞外蛮夷で外臣となった者は保塞あるいは不保塞を選択できた」という。しかしこの木簡の一節は、そのような自主的選択権を示しているものであろうか。まずは劉氏の解釈からたださねばならない。氏の解釈のごとく「不塞」と「不入葆及不居塹内与吏卒相佐」は同義つまり後者が前者の具体的内容なのではなく、すでに右に試釈を提示したとおり、後者は「葆塞」「不塞」両者の蛮夷がしかるべき職約を遵守しなかった場合のことを言っているものであり、それらが何らかの処分の対象となったことすら「輒言二千」「石」から考えられる。条文において外臣たる塞外蛮夷に「葆塞」と「不塞」両者のあつたことは確かだが、それは塞外蛮夷の選択可能な条件として提示されているのではない。何らかの事由―恐らくはその居住地域の塞からの遠近―により、外臣たる塞外蛮夷はすでに「葆塞」と「不塞」に分けられているのであり、両者は既定の与件なのである。

保塞蛮夷が、特定部族に冠せられる一種の称号であり、周辺民族の一般的行為としての「保塞」とは分けて考えねばならないという劉氏の考えには一定程度首肯できる。しかし、塞外蛮夷のケースを含む後者に対し、前者は塞内に限られるとする氏の論拠の脆弱さについてはすでに指摘したとおりである。上孫家寨簡における、「葆塞」せる塞外蛮夷の中には、いわゆる保塞蛮夷が含まれていたと見て矛盾はない。

なおこの木簡は、発掘報告書⁽¹⁸⁾のあまり写りの良くない曖昧模糊とした写真を見る限り、最初の数文字がかすれ、ほ

とんど判読することができない。現時点では公表された釈文に依拠するしかないが、文字の釈読に誤りのある可能性も否定できず、本簡に過度に依拠して立論するには一定の危険が伴うことを指摘しておきたい。

(4) 内臣か外臣か

保塞蛮夷は塞内にいるため、彼らは内臣として郡県の下に置かれたとする劉氏らの主張中、常に塞内にいたとは必ずしも言えないことはすでに述べてきた。また、塞外の「外臣」たる蛮夷の中に保塞蛮夷が含まれたことも先述の通りである。すなわち保塞蛮夷を単純に内臣と定義づけることはできないと考えられるが、ここでは観点を變えて、彼らが内臣としての条件を常に備えていたか否かを考えてみたい。

朱氏によれば、漢のいわゆる内臣（史料上、内臣と呼ばれる集団）の特徴は次の六点である（一部、矛盾や重複を整理した）。

- ① 中央政權統治区域内の民族集住区にいた。中央政權と彼らとの間には、外臣との間のような閼隘の制限がない。
 - ② 完全に中央に従属し、「国内」諸侯と同列の地位に置かれた。
 - ③ 中央政權は内臣となった地域に郡県を設置し、官吏を派遣した。
 - ④ 帰順した内臣に対して、漢法では一般人民に比して特殊な規定を設けた。
 - ⑤ 漢初は典属国、のちに大鴻廬のもとに属した。
 - ⑥ 内臣となったのちも、部族長は従前通り部族民に対する高度な統治權を持ち続けた。
- 先にも少し触れたように、内臣と外臣の別については栗原朋信氏の先駆的研究があり、少なくとも日本においては西嶋定生氏の冊封体制論など戦後の研究に多大な影響を与えてきた。朱氏のこの定義は栗原氏のそれとややずれるところ

ろもあり、栗原氏は右の②③を内臣の主要なメルクマールとしており、④についても漢法が及ぶとするが、ただし特殊規定については特に言及がない。概して、内臣における漢朝の支配の強さを強調する栗原氏に対して、朱氏は一般臣民に比しての統治の緩やかさを、その特徴として挙げるようである。すなわち内臣・外臣の定義に關して学界上、見解の統一がなされている訳では必ずしもなく、そうした状況で内臣・外臣いずれに属するかを論ずる所にそもその問題があるのだが、ひとまずは右の朱氏の定義に照らして保塞蛮夷の樣態を検討してみれば、①については塞外にいたケースが考えられ、必ずしも該当しない。②、③についても同様である。④も、塞外にあつて漢法一般はおろか特殊規定も適用されるとは考えがたい。⑤の典属国は『漢書』百官公卿表に「歸義蛮夷を掌る」とあり、蛮夷にして漢朝に帰順した彼らを掌る機関として妥当ではあろう。ただ、「歸義蛮夷」は降戸ではなく「外臣」と「客臣」の間にあつた、とする熊谷滋三氏の指摘も顧慮しなければならない。⑥保塞蛮夷の首長が引き続き領民を支配し続けたであろうことは、彼らが領民を動員する例などからも伺える所である。しかしそもそもこの条件は②③と矛盾しているのではなからうか。このように見てくれば、保塞蛮夷が朱氏のいわゆる内臣の条件には必ずしも合致しないことが見て取れるであらう。印文に「漢保塞近群邑長」「漢保塞烏桓率衆長」のごとく冒頭に王朝名を冠するのも、彼らが王朝の行政機構に組み込まれていないからこそ、その親漢勢力であることを示す必要のあつたが故であり、栗原氏が、これを外臣の印の特徴として証明する通りである。⁽²⁰⁾

劉氏、朱氏らが保塞蛮夷をあえて内臣としてとらえようとするその背後に、現代中国につらなる諸民族一統の歴史を古代に遡らせようとする意識があるごとく感じられるのは、穿ちすぎであらうか。

(5) 保塞蛮夷の統括組織

保塞蛮夷は塞内に住むゆえに内臣で、郡県に統括されたとする朱氏らの立論に必ずしも従えない以上、改めて彼らがいかなる機関によつて統轄されたかを考えねばならない。詳しくは後に別稿で論ずる予定だが、一般に漢代、周辺民族を管理する機関としては、①辺境の郡県・道（道とは異民族の錯居する地域に置かれた県級行政単位）、②属国都尉、③護羌校尉などいわゆる「異民族統御官」^②、の主に三者があつたと考えられる。①は漢族と同様の行政単位に組み込むもの、②は前漢武帝期に匈奴投降者のために北辺に設けられた機関で、後漢には遼東や西南方面にも置かれ、帰順羌や烏桓を管理した。③は前漢後期以降に辺境に置かれ始めた、周辺諸民族を管理する軍政機関で、護羌校尉、護烏桓校尉のように管理対象の民族名を冠した。諸民族に対する支配の強さでいえば①が最も強く、②、③の順に次第に緩やかになつた、換言すれば民族の自律性が強く、また居住地域でいえば①はむろん内地、②は辺境塞内の特定地区、③は広く塞外をも監督下に置いたと考えられる。保塞蛮夷の居住地域、またその部族組織のあり方などから判断するに、彼らを管理する機関としては③が最も妥当であるように思われるが、それも一律に論ずることは慎重であるべきだろう。

三 おわりに

以上、失礼を顧みず先行研究の所論に異を唱えてきたが、史料の誤つた解釈の上に立てられた論が既定の定理として一人歩きしては危険である。そのため敢えて屋下屋の検討を重ねてきた結果、保塞蛮夷をもっぱら塞内の内臣と解することはできないことが改めて確認された。彼らは必ずしも塞の内側だけでなく、外側の近接する地帯にも布在し

ていたとする廖伯源氏の説が最も妥当であるように思われる。このような塞外の近接地帯における周辺民族の、帝国にとっての役割について、『後漢書』西羌伝の記事を挙げよう。これは異民族統御官の設置に関してしばしば引用されるもので、建武九年、隴西の隗囂の倒れた後、司徒掾班彪は涼州一帯の羌族の管理―河西の竇融のもとに身を寄せていた彼は、西方情勢を正確に把握していた―に関して次のように上疏した。

建武九年、隗囂死、司徒掾班彪上言、「今涼州部皆有降羌、羌胡被髮左衽、而与漢人雜處、習俗既異、言語不通、數為小吏黠人所見侵奪、窮恚無聊、故致反叛。夫蠻夷寇乱、皆為此也。旧制益州部置蠻夷騎都尉、幽州部置領烏桓校尉、涼州部置護羌校尉、皆持節領護、理其怨結、歲時循行、問所疾苦。又數遣使駅通動靜、使塞外羌夷為吏耳目、州郡因此可得儆備。今宜復如旧、以明威防。」光武從之、即以牛邯為護羌校尉、持節如旧。（『後漢書』西羌伝）

「旧制」すなわち前漢末にあつて、護羌校尉などいわゆる異民族統御官が、管内の諸民族を監督するのみならず、「塞外の羌夷をして吏が耳目と為さしめ、州郡此に因りて儆備するを得可し」という。塞の外縁に布在する諸部族集団の、帝国辺境防備に果たした役割がここには明記されている。先に挙げた上孫家寨簡でも（その釈文を信頼するなら）、外臣として帰順した「塞外蠻夷」のうち塞近傍の「保塞」者には緊急時における漢吏卒との協働が、塞から離れた「不塞」者には謹慎自守し反乱勢力側に附かないことが、それぞれ期待されていた。このように帝国にゆるやかに帰順する半独立の民族集団が、塞の内外にあつて帝国の辺防の一翼を担っていたのであり、こうした体制のもとで塞を以て截然と内外を分かち、またこれら諸民族集団を内臣と外臣に単純に二分して論ずることは妥当ではないだろう。塞という防衛線があつたとしても、それを明瞭な国境線とは必ずしも見なし得ないことは先述の通りである。たとえば匈奴と漢との間にあつて、双方からの投降者とそれへの呼応者が長城を越えて両勢力間を揺れ動いた事実は、⁽²²⁾

境界の曖昧な中間圏が双方の間に横たわっていたことを暗示していよう。極言すれば塞外、塞内という史料上の言葉も畢竟、そうした漠たる境界域を「塞」の語によって象徴的に言い表したものに過ぎないことが多いのではなかろうか。

ここで最後に、漢側と周辺諸民族側、双方にとつての（実体としての）塞の役割について簡単に述べておきたい。漢側にとつて、それが外敵からの攻撃に備えた軍事的前線であったことは言うまでもないが、諸民族の側にとつてみれば、それは「自ら保守する」拠り所であり、漢朝による安全保障のもと、敵対する諸族との抗争を有利に導き、自族の勢力拡大と首長権の強化をもたらしことにもなったであろう。塞をめぐる双方の軍事的依存が、やがては諸民族の強大化と自立を促し、のちの五胡十六国時代を準備していったものと考えられる。

注 (1) 劉瑞「秦、西漢的“内臣”与“外臣”」(『民族研究』二〇〇三—二)

廖伯源「論漢代徙置边疆民族于塞内之政策」(吉林大学古籍研究所編『1—6世紀中国边疆・民族・社会国際學術研討会』論文集) 科学出版社、二〇〇八年

林永強「漢代“葆部”的社会治安功能考論」(『青海民族研究』二〇一—、二〇〇九年)

〃「葆塞蛮夷」相關問題考論—以「葆為行政機構說」等問題的探討為中心」(『西北民族大学学報(哲社版)』二〇〇九—)

朱聖明「兩漢“葆塞蛮夷”考論」(『河南大学学报(社会科学版)』二〇一—五)

(2) 渡邊英幸『古代〈中華〉觀念の形成』(岩波書店、二〇一〇年) 序章「〈中華〉とは何か」

(3) 矢沢忠之「前漢における堡塞蛮夷と边境防衛」(二〇一〇年度(第二六回)学習院大学史学会大会口頭報告)

(4) M. Loewe, *Records of Han Administration Vol.2*, Cambridge Univ. Press, 1967, pp.202-203. 但し、林氏はローウェ氏がこの「葆」を「郡の」ととき比較の大きな行政組織」と解しているとし、それに対する反論を展開しているが、ロ氏はそうは

言っていない（この語は次の諸簡で、通常なら郡のような大きな行政単位が入るべき所に用いられている）のであって、これは口氏著の于震波氏らによる中国語訳（「上下の文脈からすれば、或いは郡のような比較的大きな行政単位の名称かもしれない」）をさらに誤解したものと言わざるを得ない。

- (5) 甘肅省文物考古研究所編『居延新簡積粹』（蘭州大学出版社、一九八八年）七六頁。なおこの本では簡番号を74EJF3:80としていたが、後掲『肩水金閼漢簡（伍）』（中西書局、二〇一六年）
- (6) 甘肅簡牘博物館等編『肩水金閼漢簡（伍）』（中西書局、二〇一六年）
- (7) 居延旧簡の積文は謝桂華等編『居延漢簡積文合校』（文物出版社、一九八七年）による。断簡記号はZで代用する。
- (8) 羽山明『漢帝国と辺境社会 長城の風景』（中公新書、一九九九年）二一九頁
- (9) 富谷至編『漢簡語彙考証』（岩波書店、二〇一五年）「農、農官（農都尉など）」（佐藤達郎執筆）
- (10) 栗原朋信（『秦漢史の研究』（吉川弘文館、一九六〇年）第二部「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」
- (11) 王明珂『華夏辺縁…歴史記憶と族群認同』（允晨文化、一九九七年）
- (12) 京都大学人文科学研究所簡牘研究班編『漢簡語彙 中国古代木簡辞典』（岩波書店、二〇一五年）
- (13) 羅福頤主編『秦漢南北朝官印徵存』（文物出版社、一九八七年）二一九頁
- (14) 莽下書曰、…粟米之内曰内郡、其外曰近郡。有鄣徼者曰邊郡。合百二十有五郡。…（『漢書』王莽伝中）
- (15) 積文は孫家洲主編『額濟納漢簡積文校本』（文物出版社、二〇〇七年）に拠る。
- (16) 羅新「始建国二年詔書冊与新莽分立匈奴十五单于」、鄭文玲「始建国二年新莽与匈奴關係史事考辨」（ともに注（15）前掲書所収）
- (17) 積文は李均明・何双全編『散見簡牘合輯』（文物出版社、一九九〇年）に拠る。
- (18) 青海省文物考古研究所編『上孫家寨漢晉簡』（文物出版社、一九九三年）
- (19) 熊谷滋三「前漢における「蛮夷降者」と「帰義蛮夷」」（『東洋文化研究所紀要』一三四、一九九七年）
- (20) 栗原氏前掲書二二頁
- (21) 「異民族統御官」の語は三崎良章氏の用語に拠る。同氏『五胡十六国の基礎的研究』（汲古書院、二〇〇六年）一七一頁
- (22) 角谷常子「漢文景小考」（『奈良史学』一三三、二〇〇五年）